

第六回 平成二十一年十一月二十一日

(パネルディスカッション)
在住外国人が見た日本



講師…シャーリー・アンドウ

パネリスト…ロバート・シェリダン

ジョン・ジャクソン

スゼット・バートン

ゴードン・カールソン

【通訳】 テランス・ヤング

○シャーリー・アンドウ 皆さま、こんにちは。本日はお忙しい中、ようこそおいでくださいました。ありがとうございます。本日の講座は、パネルディスカッションという形で、「在住外国人の見た日本」というテーマで進めたいと思いますが、まずスライドの写真を見ていただきたいと思います。

本日来てもらったパネリストは全員、大手前大学のLEOという英語プログラムで教えている先生です。このスライドは、先生一人一人を個人的な「顔」もみていただいたいと作成したものです。

まず、ゴードン先生、私たちはゴードンと呼んでいますので、本日もそのように呼ばせてもらいたいと思いますが、彼は英語の先生のほかにプロのミュージシャンとしても活躍しています。これは彼のバンドです、そしてこちらは先生の子どもたちですね。和歌山の水族館でしょうか。

こちらはジョン・ジャクソン先生の、とても「カッコいい」時代の、今もとても素敵ですが、十七歳の時の写真ですね。これは、JJの息子のレオン君の七五三のお祝いですね。

そして、これは、宝塚音楽学校の生徒さんたちですね。

ところで、ロバート先生、私たちはロブと呼んでいます、彼は今日仕事の都合で少し遅れてきますので、彼のスライドも紹介しておきたいと思っています。こちらは、たぶんロブ先生の婚約者ですね。あ、今ロブが到着しましたので、正式に一人ひとりに自己紹介してもらいたいと思います。

○ゴードン・カールソン　こんにちは、ゴードンです。この先生たちと一緒に働くのはとても楽しくて、今日ここに一緒に参加できたことを感謝しています。ほんとうに、みんな仲よくやっています。

○ジョン・ジャクソン　私はジョン・ジャクソンです。でもみんなにJJと呼ばれています。オーストラリア出身で、きょう参加できてとてもうれしいです。

○ロバート・シェリダン　私はロバート・シェリダンです。ロブと呼んでください。カナダ出身で、バーリントンというトロントとナイアガラの滝のちょうど中間のところですね、そこで生まれ育ちました。

きようは遅れてすみませんでした。

○テラス・ヤング（通訳） 私はテラス・ヤングと申します。つたない通訳ですみません。私もアメリカのシアトル出身です。実は母が日本人で、日本の方が長いんですけど、国籍はアメリカです。

○シャーリー テリーは、大学院で研究活動を続けていますね。

○テラス（通訳） はい、私は今、神戸大学博士課程国際協力研究課で政治政策、ことに日本の政治について勉強しています。

質問1 「日本に来た理由」

○シャーリー 今からパネリストに質問をして答えてもらうという形で話を進めますが、会場の皆さんも何か質問があれば自由に手をあげて気軽に質問してください。

さて、一問目は、日本に来た理由、そして滞在期間について聞きたいと思います。

○ロバート 初めて日本に来たのは九一年半前です。カナダのブリティッシュコロンビア大学の教育学部を卒業した後、すぐに仕事に就くのではなく、何かをしたいと考えていました。ちょうどその頃、大学で出あった日本人の友達に日本に行くことを勧められて、しかも絶対関西ですよって、大阪に行くことに決めたんです。友達と一緒にでしたからバックパッカーの形で日本にやって来ました。その後ずっと、なぜか

まだ日本で暮らしています。日本で、すてきな女性に出会いました。スライド写真で出てきたと思います
が九年間交際しています。

○ジョン　私はオーストラリアの一番西の方にあるバースという町で、海外から来る人たちに英語を
教えていました。日本人の生徒もたくさんいて、やはり大阪を勧められて、しかも大阪出身の日本人女
性と出会ったんです。そして、彼女が帰国した後、私はスーツ一着と片道の切符でここに来ました。

○ゴードン　僕が日本に来たきっかけは、前の二人のような出会いではありません。

一歳のときに家族と一緒に引っ越したんですけど、両親がキリスト教プロテスタント派の宣教師で、
一九五〇年代でした。まだ日本が貧しかった時代で、父は、大工をしたり英語を教えたり、いわゆるボラ
ンティア活動をしていたようです。父はアメリカ人ですが、母はカナダ出身、そして私は日本で育ちまし
た。そういう意味では自分に関わり深い国は三つもあります。

○テランス（通訳）　ゴディーは以前、確か四カ国、自分に関係ある国があると言っていたと思いま
す。もう一国については、もしかしたらあとで話してくれると思います。

○シャーリー　私は二〇〇〇年に来日して、まず大手前で非常勤講師として英語を教えていました。
三年前から専任の教員になったんですけど、夫が日本人で、彼と一緒に日本に来ました。もともと私たち
夫婦はアメリカで出会い、結婚し二十年以上アメリカに住んでいました。彼は大学教員、私も大学のリサ

ーチャーでしたが、彼のお父さんが病気になったことをきっかけに日本にやってきました。私はフィリピンで生まれましたが、子供の時に家族と共に移住しアメリカで成長しました。

○テランス（通訳） 先ほどお話ししましたように、母が日本人、山形の方なんですけれど、父は米海軍の軍人です。彼は、アメリカのミシシッピ州、南部の出身です。海軍として日本にやって来て、うちの母と出会い、僕は日本の神奈川県座間の陸軍基地で生まれました。父の仕事の関係で日本とアメリカ双方を転々としました。日本では、横須賀や佐世保の海軍基地にも住んだ経験があつて、関西に来たのは十年前ぐらいです。初めは、アメリカからの交換留学生としてやってきましたが、それからずっと神戸に住んでいます。

質問② 「日本での生活は快適ですか？」

○シャーリー さて第二の質問ですが、日本の生活には慣れましたか、日本で暮らすのは快適ですか。ちよつと顔を見るとみんな幸せそうですね、どうですか。

○ロバート カナダにいる両親はこれを聞くことはあまりうれしくないのですが、私は日本に住んでいて、とてもとても幸せです。最初はもちろんいろいろ戸惑うこととかトラブルとかもありましたけど、今はもう母国のカナダではなく日本の方が自分の国と思つているし、多分一生ここに暮らすと思いま

す。

○ゴードン 豊中に住んでるんですけど、ご近所さんたちはみんな親切で、そこでの暮らしには何の不安もなく、ただ、人生のほとんどを日本で暮らしているにもかかわらず、やっぱり「慣れた」とは言えないように思います。今でも電車に乗るとじろじろ見られるし、そういう面ではまだ慣れていないんですよね。

○ジョン 私も幸せで、ほとんどロボの経験に近いのですが、ゴードナーの気持ちもよくわかります。寝屋川市に住んでいるんですけど、近所がとても親切で面倒を見てもらっていますし、よくお土産とかいろいろもらい物もしています。電車に乗ると、やはりよくじろじろ見られます。でも、それは日本の皆さんが悪気があつてではなく好奇心から見てるんじゃないかとそう受け取っています。最近は、冗談でロボと一緒に沖縄で余生を送ろうなどと話しているのです。たぶん、私もずっと日本に住むことになると思います。

質問3 「母国にはよく帰りますか？帰国した時に日本のどんなことを話しますか？」

○シャーリー どれぐらいの頻度で国に帰国しますか。そして、日本のことを聞かれたときに何が一番最初に思い浮かびますか。

○ロバート 毎年帰ります。カトリックの家庭なので、クリスマスの時期がとても大切で、大体十二月に帰国します。父、母、姉と弟、そして親戚や友達と会ったりして過ごします。日本の事を聞かれると、日本での家族、婚約者、彼女の母親、猫二匹、犬のことを主に話します。次に話すのは、自分の居場所とどうか自分の住んで暮らしている大阪の八尾のことです。

○テランス（通訳） これ勝手に言うとな怒られるかもしれませんが、まだロブと会ってそんなに長くなかったときに彼女の話をしてもらったんですが、とても幸せな顔でね、もう何か一目ぼれというか、そういう感じでも幸せそうですね。

○ジョン 私も大体年に一回、主にクリスマスですけど、今年は辛い夏も、日本の八月ですね、オーストラリアでは冬なんですけどパスに帰れて、また今度のクリスマス休みにも帰る予定です。ともかく、今年は、大阪のこの湿気を逃れることができてもとてもハッピーでした。

よく聞かれる質問は、日本の物価についてです。オーストラリアと比べたら実はそれほどでもないし、日本は、実はちよつと工夫すればそんなに高くもないし、とても見るものもいっぱいあるので、いつも友達にぜひ日本にくるように誘っています。

○ゴードン 私の場合はあんまり帰ることはありません。経済的な理由もあり、家族サービスで忙しいので、五十六年、ときには七年に一回ぐらいの頻度でしか帰らないのですが、さつきも言ったとおり、

私の両親は、三十八年間も日本に住んでいましたので、とうぜんですが、彼らから日本の事を聞かれることはありません。ただ、私たちの会話が英語と日本語のチャンポンによくありますので、日本の影響は相当強いと思います。なぜか、友達に日本のことを聞かれることはほとんどなく、たとえ聞かれても、「侍、忍者、柔道」といった、いわばステレオタイプのな、そういうことしか聞かれないのです。

質問4 「日本で最も興味をひかれる」とは？」

○シャーリー 何が一番日本で興味深い、おもしろいことでしょうか。あるいは、これはちょっとおかしいというか、変わっているなど感じることはありませんか。

○ジョン 私が好きなのは、日本の町並みというか古いコミュニティですね。小さい店があったり商店街があったり、小ぢんまりとしているところがとても好きです。オーストラリアでは、どうしても大きなショッピングセンターとか郊外型のストアですね、車でしか行かないようなところが多いんです。日本には、昭和時代というか、いわば「過去」との繋がりがまだまだたくさん残っていて、そんなところにとっても惹かれます。「いらっしやいませ。」と店の人がお客さんに呼びかけたり、何か個人的な関係を持つような、やさしい気持ちになれるというところが好きですね。

そうですね、「ちよつと変だな」と感じるところは、若者のコスプレというファッション現象と、もう

一つはなぜか小さい犬を連れまわっている人が多いんですけど、ピンクの服を着させたりして、お人形ブレイをしているようなところでしょうか。

○□バート 僕もその点は同感です。でも、日本という国は、いい意味でとても不思議な国でいろんな魅力があるんです。日本語を学んでいくうちに、日本の文化とか社会のありかたをもっと理解できるようになると同時に、この国がどれだけ奥深くて不思議なのかその魅力がどんどん増していく、そんな実感を持っています。

やっぱり言葉ができるようになれば、人は自分の心を許したり開いてくれたりするので、そこで、更に日本人との交流が深められるということもあるように思います。

私はこの四年間、日本の家族、婚約者の家族と一緒に住んでいて、とても幸せで、しかも貴重ですてきな時間を過ごしているので、それがとても良い経験になっています。

さて、「ちょっと変だな」というところですが、たとえば、歩いていると子どもに「外人、外人」とか指をさされたりすることでしょうか。ある面、自分は「セレブ」みたいな扱いをされているのではないかなと思う時もあります。お店に入るときなども、困った顔で「外人が来た、外人が来た、どうすればいい。」みたいな顔をされることもあります。もう慣れましたけど、やっぱり、カナダという多文化主義というか多人種・多民族の国からやってきた自分としては、それがいまだにちょっと驚く部分ですね。

○ゴードン　私は日本に長く住んでいても、毎日何か新しいことを発見します。よく日本人は個性がないとか、みんな同じだとかそういう話を聞きますけど、私はそれは違うと思います。皆さんいろんなふうに自分らしさを出していると思うし、それがとてもおもしろい。きょうここに来ている方たちも、それなりに自分なりに自分のアイデンティティーという個性を出しておられると思います。

質問5 「日本で遭遇した一番たいへんな出来事あるいはトラブルは」

○シャーリー　今まで何が一番、日本に住んでいて大変な出来事、トラブルでしたか？また、それをどう乗り越えたのか、あるいはどう対処したか、について教えてください。

○ロバート　先ほども言いましたが、やはり自分をすぐに「受け入れてもらえない」という日常的な体験でしょうか。たとえば、普通に駅員さんに何か尋ねるときでさえ、やっぱりちょっと怖がられる、とか驚いた顔をされると「何でだろう？」と思うし、なぜもっと普通に受け入れてもらえないのかって、この疑問とか気持ちには、いつもありますね。

○ジョン　当時の彼女だった奥さんを追って日本に来たんですけど、関西空港に着いて迎えに来てもらったときに、お母さんの方にはここに笑顔で迎えてくれたけど、お父さんは目を合わせない、明らかに怒っている感じで、寝屋川市の家に帰るまでの車の中はシーンとして、とても気まずい感じだったんで

すね。でも、それを何とか乗り越えて八カ月後には結婚したんです。私はまだそんなに日本語が理解できなかったのですが、結婚式で、お父さんのスピーチを聞いていたら、「外人」という言葉が何度か出てきて、まだ自分の娘が外国の方と結婚したのを許していないという感じがしました。それを会場に来ている人たちがいまも知っていて、ずいぶん落ち込みました。でも、今となったらお父さんと大の仲よしで、ベストフレンドとお互い呼び合っているぐらいなので、逆にそういう経験があったからこそ今があるんだろうなと思います。

○ゴードン　やっぱり、外国人として、最初はみんなにちやほやされたり特別扱いされるけど、結局私の悩みは、皆の中には溶け込めない、いつまでも「よそもの」みたいな感じがするんです。それが、子どもにも影響を及ぼしているのではないか、彼らがどう見られているのかなどと考えると不安になることもあります。あともう一つお話ししておきたいことは、日本の戸籍制度において、日本人と結婚すると、外国人は「備考」に載るんですよ。まるで、メモのように載ってるんですよ。正式に戸籍に入っていないという意味なんでしょうけど、とても気になりますね。結局、自分の子どもが、日本の法律上では「自分の子どもではない」ということなんですよ。親権に関するのだと思いますが、問題だと感じています。

○テランス（通訳）

僕のところは、父はアメリカ人で母が日本人なので、それと似たような話があります。うちの父はミシシッピ州出身の黒人なんです。母と出会い、結婚することになったときに、山形のおじいちゃんが反対していたんですが、僕が一歳のときにがんで亡くなりました。母には、兄が二人いるんですけど、そのおじいさんたちは子供が全員娘なんです。僕が初の男の孫なんですけど、それでもおじいちゃんは会おうとはしないんです。僕の写真だけは持っていたようですけど、うちのお父さんとお母さんにも会わずに亡くなってしまつたんです。

おじいちゃんが亡くなつた後で、おばあちゃんはやっぱり娘と会いたいし孫にも会いたいということ、初めて僕たちと会うことになつたんです。おばあちゃんは、相手がアメリカ人なのでとにかく握手しようかなと思つていたらいいんですが、うちのお父さんはおばあちゃんをハグ、つまりだきしめたそうです。

その後、おばあちゃんへ行ったり来たりするようになって、とても仲よくやっている。今はとても幸せです。うちのお父さんは余り日本語ができないし、おばあちゃんは英語がさっぱりできないんですけど、「ヤングさん」と、「おばあちゃん」とお互いを呼び合つて、会話にはなつてないのに、とにかく楽しくやつてる感じが、とつてもいいんです。今話を聞いてそんなことを思い出しました。

○司会者　それでは、どなたか会場から、ご質問がありましたらどうぞ挙手をお願いいたします。

○会場参加者　今までのお話と全く関係ないんですけども、私ども日本人は、少なくとも私の年代ではですね、食事の前に必ず「いただきます。」と言って、それから食事を始めます。これは食事を作ってくれた人、あるいはさかのぼってその材料をつくってくれたお百姓さんやら漁師の方々とか、そういう人たちに対する感謝の気持ちを込めて言うんだというふうには我々は子供の頃から教えられて、今でもそれをやっておりますが、この「いただきます。」という言葉に相当する英語はあるのでしょうか。あるいは、そういった類の、食事の前のあいさつは、欧米の国々、たとえばアメリカ、オーストラリア、カナダ等々にはあるのでしょうか。

○ロバート　私の家庭はカソリックなので、食べる前にお祈りをするんですね。「いただきます。」といった言葉はありませんが、お祈りして神様に感謝することがそれにあたるのかもしれないね。

もう一つは、食事に対して、あるいはそれを作ってくれた人に対して「おいしい」とか「作ってくれてありがとう。」とか必ず言いますね。それは、結構大事なことで、そういう意味では似たようなことをしていると思います。

○ゴードン　うちも、お祈りをしてから食べます。ただ、家庭以外の場では、まずその食事のホストか、その席で一番偉い人が食べ始めてから、はじめて自分も食べるというマナーは教えられましたね。

○ジョン　　そういう話を聞くと、オーストラリアは、少なくとも私の家庭はそんなに宗教心が強くないみたいですね。私たちはお祈りもせず、本当にただ「おいしそう」と言っただけで食べて、終わったら「おいしかった。」というコメントを言うだけのことが多いですね。

○司会者　　ほかの方、何かございませんでしょうか。

○会場参加者　　皆さん日本の方とご結婚なさってるんですけども、そのご結婚の際に招待状なんかはどういう形でお出しになったのかなど。と、言いますが、この間、日本の男性とイギリスの女性が婚約して、その招待状が私の友人のところへメールで来たと言ってますね。しかも、お祝い何にしようと言ったら、リストを送ってくれたらそこで私が選ぶと花嫁さんになる方がおっしゃったそうで、それは何かおかしんじゃないかなど、私などは思うんですが。皆さんのお国では、普通のパターンとしては、こういうふうな形をとるのか質問をさせていただきます。と思います。

○ロバート　　私たちも、もうすぐ結婚する予定なんですけど、私がメールで招待状に換えたとしたら、まず母も許さないでしょうし、マナー違反という感じはしますね。

○ジョン　　私の場合は、義理の母がウエディングコーディネーターなので、私はほとんど関わらず、日本式にやりました。基本的にオーストラリアでは、もちろんEメールじゃなく、郵便で招待状を送ります。もちろんお祝いの贈り物は、それを登録して置いておく場所があり、あとでそれが全部新郎新婦の家

に送られてくるんです。

○テランス（通訳）　これは僕の個人的な答えかもしれないけれど、最近ではアメリカなどでは、招待状は絶対手紙でしようという人もいれば、幅広くいろんな人に送れるからメールでもいいんじゃないか、という人もいます。結論から言えば、多様な方法があつていいんじゃないでしょうか。

○会場参加者　外国の人というのは毎週日曜日に教会に行くじゃないですか。子どもの頃から、いつも神が身近にいるという感じなんですけど、日本では、そういうことをほとんどしませんし、特別なときにしか神社やお寺にお参りしたりしないのですが、日本の学生をみて、何か大きなギャップみたいなものは感じませんか。

○ゴードン　まず、自分は親として、家庭内では、子どもたちに宗教心とか彼らの生き方のことを教えています。自分の家子どもたちにとつて、一つの教会のような感じですね。大学で教えている時には、当然のことですが、自分の宗教について話すこともないし、もちろん、自分の信条を押しつけることはありません。

○会場参加者　そういうふうに宗教的環境の中で育ってきた先生方に比べて、そういうことに全然関係なく、今の日本の若者たちは育ってるじゃないですか。単純に思うのは、外国の人というのはいつも神を越えたらいけないみたいな感覚があると思うんですよ。ところが、今の若い日本人は度を越えた行動が

結構多いように思うんで質問させてもらったんです。

○□バート　まず、私は、学校がカソリック系だったので、悪いことをしたときには神が見ているからあとで罰が当たるよ、みたいなことは教えられました。日本の若者についてお話がありました。私の経験では、特に度を過ぎた問題行動は目立ちませんし、すくなくとも大手前を含めて私の教えている大学では、基本的にマナーのいい学生が多いと感じています。

○会場参加者　今のお話と少し違うんですけど、皆さんのお話を聞いていると、ことに強く感じるのですが、やっぱり人間というのは自然環境によって物すごく左右されると思うんです。私は、日本というのは、非常に水が豊かで季節感をはっきりしているし、非常に生き物としては住みやすい土地だなと思うんです。日本人というのは、自然とともに季節感を常に味わいながら、生きていると思うんです。たとえば、日本の和菓子というのは季節によってその中身が変わるんです。和服も、季節によって柄や模様がみんな違う。季節に合わせて生きてるという思想が日本人の根底にある。私はそう思ってるんですが、皆さんも日本に長く住んでおられて、私が言っているようなそういう感覚を味わっておられるかどうか一度お聞きしたいんです。

○ジョン　オーストラリアについて言えば、四季はあります。ただ、日本ほどはっきりはしていませんし、例えば日本だったら秋は秋刀魚を食べるとか、はまちは冬に食べるとか、そういうことがはっきりしてい

ますね。オーストラリアでは、そうしたことは余りなく、自然も九割以上ユーカリの木なので、もみじのように紅葉する木は余りないですし、服装も寒ければ厚着で、暑ければ薄着みたいな感じですね。そういう面では、日本は私の経験では一番季節感が感じられる国だと思います。

質問6 「日本は単一民族国家だと考えられているように思いますが？」

○シャーリー 日本はよく「単一民族」で、日本人としてのアイデンティティーがとても強くとよく言われます。そういう見方についてどう思いますか。

○ロバート もちろん日本人としてのアイデンティティーは強いだろうし、江戸時代には鎖国もありましたね。何よりも、日本人同士の距離感がすごく近いと感じます。食べる、住む、寝る場所が狭いとか近い。そういう面では外国と比べたらやっぱり生活が身近な感じがしますね。

○ジョン 自分の国への誇りと文化的なアイデンティティー、とても大事なものだと思います。誰もそれは否定しません、とても大事なことですけど、やっぱりこれから、この国が更に発展していくためには、多文化的な要素を受け入れていかなければいけないのではないかと思います。もちろん日本人だけがアイデンティティーを守りたいんじゃないじゃなくて、海外から来る人たちも自分たちのアイデンティティーを守りたいんです。そこでどう調整していくかが大事なポイントで、それがうまくいけば、より良い日本につながってい

くんではないかと私は思っています。

○ゴードン 同意見で、愛国心とか自分の国のアイデンティティを持つのはとてもいいことだし、日本はとてもそれがはつきりしていて、それはいいことだと思います。

何よりも、今日ここに来てくださった参加者の皆さんが、私たちの話を聞いてくれて、私たちを受け入れようとしている、一緒に考えようとしてくれていて、それがとても大切だと私は感じます。

○シャーリー そうですね。現代という時代は、インターネットをはじめとしたテクノロジーの急速な進歩で国境を越えた「一つの世界」が現実のものになりつつあるように思います。それにもかかわらず、まだまだ自分と異なった人々に対する偏見が一向になくならないという現実があることも事実です。本日のパネルディスカッションが、こうした理解のギャップをうめるために、ほんの少しでも役立つことができたとしたら、ほんとうにうれしく思います。たとえ、互いに違う言葉を話し、異なった文化や考え方をもっているにしても、話を聞いていただいておりますように、結局のところ、皆「同じ人間」なのだという強い思いをもつことができたのではないのでしょうか。

そろそろ時間のようです。本日は、貴重なお時間を私たちと共に過ごしていただきまして、本当にありがとうございました。